

酒井仁

挿絵●瓦屋A太

お嬢様とメイドの  
百合なメイドの  
日常

～白いお屋敷の  
ラプンツェル～

試し読み版

プロローグ

第1章 お嬢様とメイド

第2章 理解できない胸の高鳴り

第3章 彼女の秘密

第4章 あなたを守りたい

第5章 祭りの夜の秘め事

第6章 かけがえのないあなた

エピローグ

# 登場人物紹介



ソフィーヤ・  
スギサカミヒロヴァ

両親を喪った悲しみから  
孤独に暮らす、薄幸の美少女。



みふねまや  
三船摩耶

ソフィーヤの前に現れた  
押し掛けメイド。実は秘密があり……。

## プロローグ

遮光カーテンのわずかな隙間から、朝の光が針のように室内に差し込んでくる。

早朝ともなれば新聞配達バイクの音、出勤する人の行き交うざわめき、ゴミ出しをする主婦の挨拶などが聞こえてきてもおかしくはない。だが窓外から聞こえてくるのは、小鳥の囀る声くらいなもの。

それもそのはず——この辺り一帯は「閑静な佇まいと上品な土地柄」が売り文句の、いわゆる高級住宅地に属しているのだ。

春先とはいえ、室内の空気はしんと冷え込んでいる。大きなセミダブルベッドとクロゼットにライティングデスクと書棚。家具類は至ってシンプルだが、それぞれの家具は外国製らしく、作りが丁寧でしっかりしている。

華美な装飾こそないが、重ねてきた年月を感じさせる良品だということがわかる。

唯一目立つのは、ベッドにかけられた羽毛布団が薄暗い部屋の中でも輝くように真新しく、染み一つ、皺一つないこと。寝台に横たわっている人物が、いかに寝相が良いかというのを物語っているかのようだ。

「……………」

ふと、布団の盛り上がりがわずかに動いて寝所の主が身じろぎをした。

そのまま身を起こした「彼女」の両の瞳はぱっちりと開いている。驚くほど大きな瞳の色は灰色、明らかに異国の血が混じっている。そして腰までたれた長いストレートロングヘアもまた、日本人の髪色ではない。

「……………」

「少女」は衣擦れの音を立てながらベッドを抜け出し、スリッパに足を通す。そうして細めた眼を遮光カーテンに向けるが、窓に近づこうとはしない。そのままカーテンを開ければ、さぞや清々しい陽光を全身に浴びられるだろうに、そうしようとはしなかった。

無言のまま廊下に出た少女を、窓からの光が照らしだす。

その姿をもし誰かが見ていたならば、少女の美しさにハッと息を飲んでその場に立ちつくしていたことだろう。柄のない純白のワンピースに包まれた肢体はほっそりとして植物的、骨も筋肉もまったく感じさせない儂<sup>はかな</sup>さだ。

そして朝日を受けた長い髪は白銀、いやわずかに黄金がかったプラチナブロンド。少女が身をよじると、美しい髪はしゃらしゃらと音を立てそうに揺れ動く。

その髪に勝るとも劣らぬのは少女の色白の肌。

それは蠟石のように青白く、病的な中にも危うい色気を感じさせる。全身にまとった物憂げなオーラの中心にあるのは、あの灰色の瞳。そして一流の人形師が精魂込めて作り上げたかのような、小さな美貌。

無表情なそれはまるでよくできた陶器の人形……いや、それは紛れもなく命を持った少女の横顔。小さな貴婦人のようで、それでいて確かな「女性」を感じさせるのは、わずかに上下する胸元、そして緩やかなカーブを描く腰つきであろう。スレンダーでありながら、少女の肢体は子どもから大人への、まさに途上にあつた。

おそらくノーブラであろう胸元はふつくと盛り上がり、角度によつてはつんとした突起物が透けて見えそうだ。ヒップもまだ青い果実の硬さを残してはいるが、それはむしろ将来性を感じさせる丸みである。

自身がそんな未完成の色気を放っていることなど一切頓着せず、娘の身体が光の中で微かに揺れる。

ばた、ばた、ばた……少女は廊下を進んで階下に向かう。

長い長い一日の中で、この朝の儀式は少女にとつてかなりの苦行であるといえた。なぜなら、玄関先まで行って宅配された朝食をわざわざ取り出し、それを食卓まで運ばなければならぬからだ。

(朝ごはんなんか、いつそ食べなくて済めばいいのに)

だがしかし、少女は一度それをやって軽い栄養失調で倒れた経験がある。少女曰く「なにも食べなくていいなら、それに越したことはない」と栄養点滴を受けながら、平然とそう語ったという。

いかに植物的な美少女であつても陽光だけ浴びて生きていけるはずもなく、やむなく毎朝の苦行に耐えて食卓に朝食を運び、それをもそもそと口にするのだ。

焼き上がつて間のない、まだ温かなテールロール、スクランブルエッグにソーセージとキノコのソテー。ポットには舌を火傷やけどしそうなコンスープ。シンプルであるがゆえに素材の良さで勝負する極上の朝食を、少女は半分以上食べ残し、残りは顔色一つ変えずにディスプレイに叩きこんだ。

彼女——ソフィーヤ・スギサカ・ミハイロヴァの一日は、概ねおおむこのようにして始まるのだった。

憂鬱な、ひたすら憂鬱な朝食を終えてシャワーを浴びると、ソフィーヤにはすることがなくなつてしまつた。

この広いお屋敷にこんな年若い美少女がたった一人で暮らしているという事実を、近所

の住人が知ったら、さぞ驚くことだろう。幸いにして高級住宅地の住人に下世話な詮索好きはおらず、またソフィーヤも滅多に外出することがなかったので、それも当然といえるかもしれない。

ほんの一〇年ほど前までは、そんなことはなかった。

ロシア人を母に、日本人を父に持つソフィーヤは七歳になるまでこの屋敷で親子三人仲良く幸せに暮らしていた。しかし、両親が不慮の飛行機事故にあつて鬼籍に入り、それ以来ソフィーヤはずっとこの屋敷で一人暮らしをしているのだ。

邸内の掃除は週に一度のホームヘルパーが。

三度の食事は宅配で届けてもらっているの、ソフィーヤは一步も外に出る必要がなかった。無論、まだ義務教育課程にあつた少女に、まともな学校生活を送るよう、あるいは養父母を見つけるべきだとする向きもあった。

特に亡き父親、杉坂一郎すぎさか いちろうと会社を共同経営していた親友、鹿島敏郎かしま としろうは幼い少女の身を案じ、ソフィーヤさえよければ自分の養子にならないかとまで言つたほどだった。

だが、ソフィーヤはそれらすべての申し出を拒絶した。

亡き父、亡き母の思い出が残るこの屋敷で自分は暮らす、勉学は自分一人でちゃんとすると頑なに主張し、ソフィーヤの後見人となつた鹿島もとうとう少女の一人暮らしを認め



たのだった。

ソフィーヤは約束通り、ネットスクーリングで確固たる成績を残し、小学校を卒業する頃には既に高二程度の学力に達していた。その後、鹿島の勧めもあっていちおう名門とされる女学校に籍だけは置いたものの、今まで一度たりとも登校したことがなく、反面学業は既に大卒レベルを優に超えていたのだった。

母の好きだったクラシックでも聞こうかとリビングに足を踏み入れる。

大画面テレビとホームシアターセットはもう何年も電源すら入れられたことがない。父親の持ち物だったゲーム機もどこかにあるはずだが、少女はテレビもゲームも煩くて好きではなかった。

調べもののためにPCやネットを使うことはあるが、インターネットやオンラインゲームに時間を費やすなど、まったくの無駄だと思っている。一日分の課題をパソコンでやり終えたあとの昼下がりなどは、こうしてクラシックを聞きながら、母の形見の詩集などに漫然と目を通すくらいのことしかしていない。

それがソフィーヤの日常であり、少女はそれ以上の変化を何一つ望んではいなかったのだった。

「……あ」

ふと電話機の留守録ランプが点滅していることに気付く。

見るまでもなく、相手はわかっていた。今は父の代わりに会社経営を一手に引き受けている鹿島からの、ご機嫌伺いの電話だろう。

両親が他界した時、数少ない親戚からはソフィーヤを引き取りたいという申し出もないわけではなかった。だが、彼らが両親の遺産目当てであることは、幼いソフィーヤの目にも明らかだった。そういった連中からソフィーヤを保護してくれたのは、父の親友である鹿島だ。

鹿島個人に恩義を感じていないわけでは、ない。

『ソフィーヤ、私は杉坂とゾーヤさんの忘れ形見であるキミに、幸せになって欲しいだけなんだ』

けれど、だからといって鹿島の養女になりたいなどは微塵みじんも思わなかった。

鹿島が本当の悪党なら、いくらでも手を回して杉坂夫妻の遺産を掠め取ることもできただろう。そういう意味では彼は真正の善人であり、ソフィーヤを自分の肉親のように思っていることもわかっていた。

(でもだからって——お父さまや、お母さまのことを忘れられるわけない)  
仕事熱心だった父の記憶は、年ごとに朧なものになっていく。

だが母ゾーヤの記憶は、ソフィーヤと同じプラチナブロンドの髪と灰色の瞳、温かな笑顔と温もり、そして母の手料理の記憶はいまだ鮮明に残っているのだ。

ソフィーヤがその気になれば、就職先に困ることはないだろう。思い出の残るこの屋敷から飛び出し、いくらでも明るい未来を掴むことができる。

語学堪能な少女は日本語とロシア語の他に英語その他数ヶ国語を巧みに操り、鹿島の紹介でいくらでも優良な働き口を見つけることができる。しかし、ソフィーヤには能力はあっても、未来に対する期待や好奇心、扉を押し開いて前に進もうという意思が決定的に欠落していた。

そしてそんな自分の現状に対し、なんら変えようという考えもなかった。

読むともなく詩集を眺めてうとうとしていた時、ソフィーヤはインターホンの呼び鈴で目を覚ました。

(誰だろう)

宅食業者は黙っていても勝手に宅配ボックスに食事を入れて帰っていく。

その他、別に通販で注文したものもないはず。この辺りは治安もいいで、セールスなども来ないはずだ。

(もしかして、鹿島さん)

考えられるとすればそれくらいしかない。

何度電話しても出ようとしないソフィーヤについて業を煮やし、直接会いに来たのだから。少女は億劫おっくうな気分です。ソファから腰を上げると、玄関に向かった。

関わりたくないといつても自分はまだ未成年で、鹿島は後见人。訪ねてこれれば、会わないわけにはいかなかった。

「……ふう」

だが、ドアスコープを覗くことすらせず、扉を開いたソフィーヤの前に立っていたのはまったく予想外の人物だった。

「ソフィーヤ・スギサカ・ミハイロヴァさまでしょうか？」

「はい——だれ……？」

大きく肩の膨らんだ黒のワンピース。レースの縁取りをした純白のエプロン。スカート丈は長く、わずかに覗いた足首は白いタイツに包まれている。

硬そうな髪質の黒髪はショートで、白いヘッドドレスを戴いている。身長はソフィーヤよりかなり高く、澆刺とした生気を感じさせる。そして胸元は挑むがごとき膨らみでエプロンドレスを持ち上げていた。

(すごく、大人っぽい人……)

初対面の女性相手にそう思ってしまうほど、「彼女」のスタイルは抜きんでていた。

大人っぽいのは突き出た胸元だけではない。エプロンドレスでキュッと締められた腰は見事にくびれていて、その曲線はそのまま豊満なヒップに流れていく。まさしく成熟した大人の女性の臀部でんぶに、ソフィーヤは圧倒される。

安定感のある腰回りがそれほど太く感じないのは、おそらく脚が長く、ふくらはぎが体操選手のように引き締まっているからだろう。

身長同様に肩幅もそれなりにあるはずだが、「大女」という印象を与えない。それだけプロポーシヨンにメリハリが利いているからというのと、ピンと伸びた背筋と立ち姿が美しいからに違いない。どこかの外国人グラビアモデルだと言われれば、素直にそれを信じられるほどだ。

人目を引くのはその体型だけではない。

長い睫毛まつげに縁取られた意志の強そうな瞳は漆黒だが、鼻筋がすつと通っていて彫りが深く、顔立ちは日本人離れした、だがかなりの美人……見る者の心を温めるような笑み、身体全体から発せられる生気は、夜の静かな月のようなソフィーヤとは対照的だ。

そしてなにより……なにより目の前にいるこの女性は、どこからどう見ても「メイド」

に他ならなかったのだ。

「え……ええとどちらさまですか」

蚊の鳴くような声でそう尋ねるが、メイドの耳には入っていないようだった。

黒髪のメイドはスカートの裾を両手で軽くつまみ上げ、右足を後ろに引いた。そうして背筋を伸ばしたまま、深々と頭を下げたのだ。優雅でいて慇懃な挨拶にソフィーヤはただ驚くばかり。

メイドはゆつくりと顔を上げると、黒曜石のような瞳をキラキラと輝かせながら、ソフィーヤをじつと見つめる。やがてその唇がわなわなと震え、豊満な胸の前で両手を組んだ。それはまるで感激に言葉を失っているかのようだ。

「あのう」

がばっ。

なんの前触れもなく、メイドはソフィーヤに抱きついてきた。そしてあろうことか、そのまま自分の唇を少女のそれに押し当ててきたのだ。

「? ? ? ? ? ? ? ? ? ?」

本当に驚いた時、人は自分がなにをされているのかすら理解できないものだ。

たっぷり一〇秒間、メイドのペーゼを浴びたソフィーヤは、唇が離れた時も人形のように



に突っ立って、なんの反応もできなかった。

「あ……もつ、申し訳ございません！　あまりにもそっくり、いえ！　お、お嬢様がお美しかったものでつい、行き過ぎたご挨拶を」

「は、はあ……？」

深々と頭を下げるメイドの姿に、ソフィーヤはようやく自分が初対面のメイドの口づけを受けたと気付き、「なななな」と顔を真っ赤にしてうろたえる。

「な、なに、あなたなんなの！」

「はいっ！　初めまして、ソフィーヤお嬢様！　わたくしは三船摩耶<sup>みふねまや</sup>、お嬢様のお世話をするためにやって参りましたメイドでございます！」

はきはきと答える黒髪メイドに、ソフィーヤは目をぱちくりさせることしかできなかった。





「ひゃっ？」

脱衣所から声をかけられ、ソフィーヤは湯船の中で硬直した。

すりガラスの向こうにメイド服のシルエットがうつすら見える。ソフィーヤはまたも思おもかけなかった状況に混乱し、「え、ええ」と曖昧に言葉を濁す。

「十分に温まられましたでしょうか」

「ええ、その、あ、温かいわ」

「それはようございました。では、お背中をお流しさせていただきます」

「え……………えっ？」

思わず声がひっくり返った。ざばりと湯船から細い肢体を起こしかけた、その目の前でメイドのシルエットが動き、ぱさりとメイド服が床に落ちるのが見えた。裸……………ではないが、紺色の水着のようなものを身に着けている。

なにが今、自分の目の前で起こっているのだろう。メイドの口にした「背中を流す」という言葉がぐるぐる頭の中で回るが、なかなかその意味するところが理解できない。そして理解した瞬間、ソフィーヤは髪の毛が逆立つほどの衝撃で、口をパクパクさせることしかできなかつた。

(う、うそでしょう)

最初に、そう思った。

相手は自分と同じ女性、けれど自分は一糸まとわぬ全裸なのだ。裸を見られるなんて、子どもの頃、母親と入浴した時以来のことだ。どんな顔をすればいいのかわからない、いや今日会ったばかりの他人に、裸なんて絶対見られたくない。

そんなことになったら、恥ずかしくてどうなってしまうかわからない。

(でも……でもあの人、このままじゃ本当に入ってきちゃう!)

反射的に湯船から出たソフイーヤは、身体も拭わずに浴室を出ようとして——満面の笑みで佇むメイドと対面した。

「……………」

「まあお嬢様に開けていただくとは勿体ないもったいことです。さあさ、お座りになって背中をお向けください」

「あ」

ぐい、と両肩にメイドの手が伸びて、そのままぐるりと回れ右をさせられる。洗い椅子にちよこんと座らされると、鏡の中でメイドが洗面器に湯を取って、ナイロンタオルでボディーツープを泡立て始めるのが見えた。

(この人、なにを着てるのかしら。あれは水着？ それにすごく胸が大きくて、背が高く

てモデルさんみたいだわ)

しばし「恥ずかしい」という気持ちも忘れ、ぼんやりとそんなことを考えていたのは、おそらく状況に困惑しきった思考が現実逃避していたのだろう。

確かにメイドは紺色の、いわゆるスクール水着を着ていた。明らかにソフイーヤより年上のメイドが着るにはあまりに不自然だが、そんなことを思う余裕はない。少女は身を縮めてできるだけ裸身を晒さないようにするのが精一杯だ。

むしろ曇りかけのバスミラーに映ったメイドの曲線美に、あらためて見惚<sup>みほ</sup>れてしまいうだ。

メイド服の上からでも十分見て取れたことだが、肌にはピッタリ密着した紺の水着に浮き上がったメイドの肉感ときたらどうだろう。いかり肩でも撫で肩でもない形のいい曲線は二の腕に伸び、さらに乳房の丸みは母性をアピールしている。

華麗としか言いようのない腰のくびれを支えるのは安定したヒップとむっちりした太い腿。それはただ太いのではなく、若々しい駿馬のような生命力に溢れ、まっすぐに伸び、そして膝で大きくカーブして、すつきりとした脛のラインに流れていくのだ。

ナイロンタオルを持ったたおやかな両腕は魔法のように湯気の中で揺らめき、ソフイーヤは催眠術にでもかかったように、鏡の中のメイドの姿を熱く見つめている自分に気付く

のだった。

「失礼いたします——」

「あ」

ボディーソープをたっぷり泡立てたナイロンタオルで、細く薄い肩をゆるゆると擦り出す。ふわりと石鹸の香りが漂ってソフィーヤの鼻孔をくすぐった。そこにソフィーヤ自身の体臭、そしてもう一つ……おそらくメイドの体臭も混じっている。

それは一〇年ぶりに嗅いだ「他人」の香りであり、そしてとても大人っぽいものだとソフィーヤは感じた。

「お嬢様は肌がお綺麗ですね。けれど、差し出がましいようですが、もう少し陽に当たったりした方が、もっとお美しくなれると思いますよ」

「……………」

確かにソフィーヤは家から出ることもなく、日光にもほとんど当たらない。色白と言えば聞こえはいいが、実際はぞつとするほど青白く、儂げに見える。メイドは気にすることなく肩甲骨から肩、二の腕を洗っていく。

「お嬢様、少し腕を上げていただけますか。そう……」

メイドの手が脇腹からお腹の辺りに回ってきて、ソフィーヤはびくつとなった。前は自

分で洗えるから、と言おうとしたがメイドの手は既に太腿に移動していたので、言う機会を逸してしまふ。

太腿から膝、ふくらはぎの辺りまでくると、メイドはほとんど少女に背中から覆いかぶさるような体勢になってしまふ。スクール水着に包まれたメイドの胸部が、ソフィーヤの背中に押し当てられ、少女はドキリとした。

(や、柔らかくて大きなものが当たってる……大人の女の人の、胸……)

一〇年間引きこもっていた少女は、無論のこと他人に直接接触したり、触れられたりといった経験に乏しい。まして、女性の乳房の感触など赤子の頃以外に知る由もない。にもかかわらず、メイドのふくよかな胸の感触は、なぜか温かく、安心できる感触に感じられたのだった。

(お母さまは、私と同じでそんなに大きくなかったような気がするけれど)

とはいえロシア人の母ゾーヤは女性にしては長身で、スレンダーとはいえソフィーヤよりバストはあつただろう。そう思えば、ソフィーヤは自分のなだらかな膨らみがほんの少しだけ不満だった。

そうこうするうちにメイドはソフィーヤの足指を丁寧に洗い始める。

ナイロンタオルではなく、手にたつぷりの泡をまぶして足指の一本一本指の間も丹念に

揉みほぐすように洗うのだ。少しくすぐったいが不快な感じではない。むしろ無抵抗な状態で他人に足指を委ねることに、ソフィーヤはいつしか心地よさを感じていた。

「お嬢様の肌はきめ細かいので、ナイロンタオルで擦るより、こちらの方がよいかもしれませんね、失礼いたします」

「……えっ……」

泡にまみれたメイドの手が、再び脇腹、そしてお腹に伸びてきたのを見てソフィーヤは目を丸くした。というのも、メイドの手にナイロンタオルはなく、手の平で少女の腹部を撫でまわし始めたからだ。

つるつると平らなお腹をさすられ、その手はやがて乳房の下に近づいてきた。サイズ控え目とはいえ、そこは確かに乳房の膨らみ。脂肪の丸みを確かめるように、メイドの手の平はソフィーヤの肌を泡まみれにして、絹のような白い肌を擦り続ける。

「あ、あのっ。そこは、そこはいい、です……」

消え入りそうな声でかろうじてそう口にしたが、メイドの手は止まらない。

「ダメです、お嬢様の繊細な肌はタオルですと荒れてしまう恐れがあります。どうぞそのまま、わたくしの手に身を委ねてくださいませ」

「あう、う」

動転しているソフィーヤのか細い声に比べ、メイドの口調は頑として揺るぎないものだった。久しく人と会話していなかったソフィーヤの気力は、あっけなくそこで潰えてしまった。

(けどこんな……こんなの恥ずかしい……あつ、て、手が)

下乳を洗い終えたメイドの手の平は、やはりというか当然のように上に移動してくる。初々しい少女の両の乳房、その中心にぼつりと咲いた蕾つぼみのようなピンク色の突起物。そこを中心に温かく柔らかな手の平が円を描くように、ソフィーヤの乳房を撫でさすり、洗っていく。

いや——それはもはや洗うなどという動きではない。

優しく、時に大胆に指が肉球に食い込んで、それは明らかに「揉む」という動きであった。メイドはほとんど少女の肢体を両腕で抱え込むようにして、両手でソフィーヤの乳房を丹念に、じつくりと揉みほぐしていく。

「どうですかお嬢様。強過ぎではないですか。痛くはありませんか」

「いたく、ない……ない、けど………んんっ」

メイドの手の平は、少女の突起が既に硬くしこつていることに気付いていた。

気付いてはいたが、それについて言及しない。ただ細い指先でニップルをつまみ上げ、





愛おしむようにシャボンの泡でそこを執拗に刺激し続ける。

(ああダメ、そこは)

ソフィーヤは、何度も漏れそうになる声を飲み込んで口をつぐむ。うっかりすると甘ったるい声を出してしまいそうになるからだ。そしてその理由もわかっているが、今日初めて会ったばかりのメイドにそれを言うのは、あまりにも恥ずかしい。

(そこを弄ると、じんわり気持ちよくなってしまうのに……)

ソフィーヤはなお執拗に乳房をさするメイドの手の感触から意識をそらそうとした。そして窮余の策として、「あの……」とか細い声で言った。

「そ、そろそろ髪を洗いたいんですけど」

だからもう身体を洗うのはやめて欲しい、そう言うつもりだった。

ソフィーヤの髪はただでさえ長い上に、髪質が細やかで傷みややすい。なので入浴の際は自分で丁寧にトリートメントしないと、髪がすぐ傷んでしまうのだ。それに、プラチナブロンドの髪は母譲りの大切なものであった。できれば他人任せにはしたくない。

「かしこまりました、お嬢様」

しかし、そんなソフィーヤの思いを知ってか知らずか、黒髪のメイドはシャワー温度をほんの少し上げて床に湯を流し、浴室全体の温度を上げようとする。そしてしゅるりとソ

フィーヤの腰まで伸びたロングヘアをほどくと、湯で梳くように濡らしていった。

「あ……っ」

メイドの指が髪の間をすり抜ける感触に、思わず声が漏れる。だがそれは不快なものではなく、むしろ心地よかったからだ。かけられる湯温はそれくらい適切な温度で、メイドの手つきは決して髪を傷めることのないほど繊細なものだった。

（ああ……お湯が気持ちいいわ）

「お嬢様の髪は本当にお綺麗ですね。こうして洗う手が、緊張で震えてきてしまいそうです」

そう言いつつ、メイドの手つきはしっかりと、そして丁寧にプラチナブロンドを梳き洗いしていく。嗅ぎ慣れたシャンプーとトリートメントの香りは、母の代からずっと使っているものだ。

キューティクルに沿って細かな泡を撫でつけるようにして、メイドは少女の美しい髪を極上のそれに仕上げていった。

「わたくしの髪は父親に似て硬くて癖っ毛ですので、本当に羨ましいです。どうぞこの髪は、いつまでも大切になさってくださいませ」

「……ええ」

もしかしたら、彼女は母ゾーヤのことを知っているのだろうか、とソフィーヤはふと思った。そう、鹿島が彼女を送り込んできたのなら、ゾーヤのことも聞かされているのかもしれない。

けれどメイドの口ぶりは心からソフィーヤの髪を称賛する以上のもではなく、そのこと自体は決して悪い気はしなかった。

「さあ、あまり時間をかけては湯冷めされてしまいます。恐れながら御髪を上げさせていただきます、お身体の続きをさせていただきます」

「ひゃわ？」

手際よくソフィーヤの髪をまとめ上げると、メイドは再び両手にボディシャンプーを取って泡立て始めた。また乳房を弄られるのだろうか。もうそこは自分で洗うから、とさしものソフィーヤもそう訴えようとした時であった。

ぎゅむ……と少女の肩甲骨に大人の膨らみが押し当てられ、メイドの両手が後ろから伸びてきた。泡まみれのそれはソフィーヤの乳房でも、腹部でもなく、さらに下方——細っこい太腿に伸びてきていたのだ。

ほとんど筋肉のない瘦せっぽちの青白い太腿を、泡が覆っていく。メイドの手は太腿の外側から膝の裏へ滑り降り、少女は緊張に強張った。

そこより先は既に一度メイドによって撫で洗いされているはず。しかしメイドの手はそこから思いもかけぬ方向に移動を始めたのだ。

(ひあつ、そ、そこは……!)

膝小僧に当てられたメイドの両手に、「ぐっ」と軽く力がこもった。

虚を突かれたソフイーヤの股が軽く開いたかと思うと、手の平は太腿の内側にさも当然のように入り込んできた。

内腿は腿の外側よりもずっと敏感で繊細だ。だが股を閉じようとしても、メイドの力は意外と強く、ソフイーヤは洗いや椅子に座ったまま脚を軽く広げさせられるという、かなり恥ずかしい格好を強いられる。

「お嬢様——」

と、耳元でメイドが囁きかけてきた。

「鼠蹊部は入浴してもつい洗うのがおろそかになりがちな部分です。お嬢様のような成長期の女性にとっては、特に念入りに洗い、清潔を保っておくべき場所なのです」

そう言って、両下肢の付け根の部分に指先を押し込むように、ボディシャンプーのぬるみを塗りつけてくるのだ。

場所というとちょうど恥骨の両側……すぐ真横が大陰唇であるということを考えれば、

確かに清潔を保つよう、念入りに洗ってしかるべき場所ではある。そうなのだが、他人の手でそんな際どい個所を洗浄されるのは、年頃の少女にとっては顔から火が出るほどの恥ずかしさでもあった。

「あの、そこは、わ、私が自分で」

「いいえ、いけません。これもソフィーやお嬢様のお世話をするメイドの勤めでございますから」

これがもしメイドでなかったら。

あるいはメイドの口調にほんの少しでも邪な響きがあったなら、ソフィーヤもきつぱり拒否することができたかもしれない。

だがメイドの口調はどこまでも真面目であり、己の仕事に対する実直さに満ちていた。それに——それに、これを口にするのはなにがあっても無理なことではあったが——恥骨付近を親指の腹でぎゅっぎゅと押されるのは、存外に心地よいマッサージを受けるような感じだったのだ。

そこに、肩甲骨に押し付けられるメイドのふくよかな乳房の柔らかさが加わって、ソフィーヤはまるで全身が高級全自動マッサージチェアに委ねられているかのような快美な感覚に包まれていた。

「あ……ん、んふう……っ」

「お嬢様、痛かったらそうおっしゃってください。もう少し力を緩めましょうか」

「うう、ん……だ、だいじょう、ぶ……」

本当は痛いどころか、むしろ油断すると鼻にかかった喘ぎ声でも出てしまいそうなほどだ。しかし、間違ってもそんなことは言えない。言えばこの積極的なメイドが次はなにをしてくるのか、知れたものではない。

いや、既にメイドの指先は鼠蹊部はかなり奥まで、ほとんど臀部に近い部分まで潜り込んでいる。ソフィーヤは意識を指の動きからそらそうと、ふと浴室鏡に目をやった。そして、そこに映し出されていた自らの裸身に頬が熱くなるのを感じた。

鏡の中では銀髪の少女が湯気の中で軽く脚を広げ、一糸まとわぬ真つ白な裸体を惜しげもなく晒している。背中から抱きついているスク水姿の黒髪メイドは、恐ろしく真剣な表情で肩を揺らし、ソフィーヤの股にシャボンを塗りたくって洗っている。メイドの目元がほんのり赤く染まっているのは、きつと浴室がお湯で暖まっているからだろう、そうに違いないと少女は自分に言い聞かせた。

(けど……あんな恥ずかしいところに触れられて、洗われちゃったら、あとはもう……あとは……)

首も脇腹も腹部も太腿も、ふくらはぎや足指、さらに乳房や乳首まで洗い清められてしまった。あと、メイドが触れていない場所といえば、残るはただ一か所しかないということに、ソフィーヤは気付く。

（けどそんなまさか……いくらなんでもあり得ないわ。あ、アソコを人に洗われるだなんて。私は、ちっちゃな子どもじゃないんだから）

だがこのメイドに関していえば、なにをしても不思議ではないように思える。

なにしろ今メイドが触れている部分のほんのすぐ隣はまさにその場所、乙女の最も大切に敏感な不可侵領域なのだから。

「お嬢様——お顔が少し赤いようですが、少しおのぼせになりましたか」

「えっ、いえ、大丈夫。大丈夫だけど、だっ、だめっ！」

「はい？」

「そこは、もういいから……！　そこは自分一人で、ちゃんと洗えますから、も、もういいです……………」

身をすくめ、消え入りそうな声でそう呟くと、メイドは「かしこまりました」とあつさり身を引いた。

「しかしお嬢様、そこはただ洗うのではなく、ぬるま湯で丁寧に、爪で傷をつけないよう



お気を付けください。ではわたくしは湯上がり準備をして参ります」

言うが早いか、メイドはさつきと自分の身体についた泡を洗い流し、シャワーヘッドをソフイーヤに手渡した。もちろん、湯温を少し下げること忘れなかったのは、なんとも気配りのゆき届いたことだ。

「……………」

メイドが出ていってしまおうと、急に浴室ががらんとしたような気がした。

けれどそれはきつと気のせいに違いない。なぜならこの一〇年間、ソフイーヤは誰とも風呂場に入ったことがなく、身体を洗うのも常に自分で行ってきたからだ。先ほどまで感じていたメイドの手の平の感触はまだ肌に残っているが、そんなものに懐かしさや郷愁を感じing方がおかしいのだ。

そう自分に言い聞かせると、ソフイーヤは股間の「あの部分」を自分で洗い始める。もちろん何百回となく洗ってきた場所だから、今さらどうということはない。

初々しい肉の花びらが幾重にも重なったそこは、特にソフイーヤが思春期を迎えてからは汚れが溜まりやすいので、薬用石鹸を使って指先で優しく洗う。しかし今日に限っては、なぜか乙女の花びらはいつにも増して敏感で、少し触れただけでピリピリと電気にも似た感覚が広がっていくような気がしたのだ。

見ると黒のパジャマにエプロンだけを着けた摩耶が、なにか料理の下準備をしているようだった。メイド服ではないその姿は、妙に新鮮に思える。摩耶の穏やかな笑顔を見たソフィーヤは、ホッとすると同時にさつきまで自分がしていたことを思い出し、少し顔を赤らめた。

恥ずかしさをごまかすようにシンクでさつと手を洗い、摩耶の差し出したミネラルウォーターのグラスを受け取った。

「なにか、温かいものでもご用意いたしましたでしょうか」

真摯にそう言ってくれるメイドの顔が、まともに見られなかった。

いまだ彼女の素性などははっきりしないものの、今のソフィーヤにとって摩耶の存在は正直心強いものだと思った。もしもさつき、あの孤独感を感じた時に、このお屋敷に本当に自分一人だったら、心細くてベッドからも出られなかったに違いない。

(けど、そんなこと恥ずかしくて言えないわ)

両親を喪ったあと、屋敷にこもりきりになったのはただの自分の我儘に過ぎないということ、ソフィーヤは自覚していた。いや、現実から目を背けて心地よい思い出の中に浸ることで自分をごまかしていただけ。

しかし、パジャマ姿のメイドはそんなソフィーヤの表情を誤解したのか、深々と頭を下

げてみせた。

「ソフィーヤお嬢様は、おそらく鹿島さまにわたくしのことをお尋ねになられたと存じます。けれど、鹿島さまはわたくしについて詳しいことは語られなかつたでしょう」

「え、ええ」

「心苦しいのですが、わたくしのことに関しましては、今はまだ話すべき時ではないと考えております。けれど、これだけはどうか信じてください」

すいと伸びたメイドの手が、小さく白い少女の手を取り、その黒々とした瞳がまっすぐにソフィーヤに向けられる。

「わたくしはお嬢様のお力になるために、このお屋敷に参りました。この気持ちに嘘偽りはございません。言葉だけで信じていただけるとは思っておりませんが、どうか信じてください」

「正直、その言葉をどこまで信用していいのか、ソフィーヤにはわからない。

疾しいところがないのなら、初めから正直に言つて欲しいとも思つたし、かといつて摩耶が悪意でソフィーヤに近づいたとも思えない。

でも、ただ一つ確実に言えることがあるとすれば、自分は既にこのメイドを半ば受け入れ、このまま住み込みメイドをしてもらつても構わないと思いかけているということであ

った。

「あした……いえ、明日でなくてもいいから、あれを作ってくれないかしら」

「はい、なんなりと」

「むかし、お母さまが作ってくださったクリームのプディング……中にクルミとアプリコットジャムが入っているの」

「かしこまりました、とお辞儀をするメイドに就寝を告げると、ソフィーヤは自室に戻った。ベッドに横たわると、さつきまで感じていた孤独感や不安はすっかり拭い去られ、その代わりに手の平にメイドの手の温かみがまだ残っていた。

（あの人、夜はああいう格好で次の日の仕事の準備をしているのね）

今頃は元空き部屋に戻ってベッドに入っているのだろうか。

きつとあの勤勉さだから、朝の目覚めもよく、てきばきと早朝から働くに違いない。もう長年、ソフィーヤ一人だったこのお屋敷の屋根の下に、もう一人の人間が寝ているのかと思うと、なんだか不思議な気分だ。

けれど、今はそのことが少女を安心させる。

（あの人、これまでたった一人で暮らしていたことがあるのかしら。それともご家族と一緒に暮らしていたのかな）

摩耶の家族に閑しては、本人の素性以上に謎だらけだ。でもあの有能な働きぶりから、きつと家での躰もきちんとされてきたのだろうとソフィーヤは思う。それともどこかのメイド養成所で訓練を受けていたのだろうか。

一人床に入った時、寂しさや孤独を感じたりはしなかったのだろうか。

(もしかして、あの人も私みたいなことをして寂しさを紛らしていたのかしら)

気がつけばソフィーヤの手は再びワンピースの内側に入り込み、素肌の乳房や太腿やお腹を撫でさすり始めていた。それはもう寂寥感せきりょうかんを呼び起こすものではなく、すぐ近くにあのメイドがちゃんといるといふ安心感をもたらすものであった。

(そう、今とても優秀なメイドだからって、あの人ももっと若い頃は、色々不安だったりしたこともあったはず)

そんな時に摩耶とソフィーヤがもし知り合っていたら、自分は彼女にもっと親しみを覚えていたかもしれない。一緒にお風呂に入っても、ずっと親しげに身体の洗いっこなどもできたかもしれない。

そんなことを考えつつ、少女の手は乳房を揉み上げ、つんとしこった突起物を指先でつまみ上げてみた。

ぎりぎり痛みを感じない程度の力で、指の腹の間に挟んだニップルを弄ってみると、乳

房全体に「じわあっ」と心地よさが波紋のように広がっていく。

そして胸の鼓動は熱く高鳴っていった。

（あの人も、私の身体を触っている時、こんなふうにドキドキしたのかしら）

そうだったら、ちよつと恥ずかしい。でも少しだけ嬉しいかもしれない。そしてもし今度、ソフイーヤが彼女の肌に直接触れるようなことがあれば、この高鳴りはもつともつと得難いものになるような気がした。

「はあ……………っ」

布団の中で大きく息をついて、ソフイーヤは少し背を丸めた。左手を右の乳房に滑らせつつ、今度は右手を太腿の付け根に這はわせていった。

平らな下腹部に指を這わせると、指先に淡い毛を感じた。少女のアンダーヘアは髪の色と同じプラチナブロンドなのであまり目立たないが、それでもある程度は存在する。指に絡ませるようにかき回しながら、指先を少しずつ恥骨の傍に近づけていった。

（お股の奥が、熱い）

布団の中に潜っているせいかわ、身体が火照っている。だが下肢の付け根のその部分は、それとはまったく別の熱を帯びているのがわかる。

（こんなところ、お風呂場以外で触るのは初めて）



だが摩耶の指がぐいと食い込んだ時は、言いようのない快感を感じた。自分で弄つても同じような感じになるだろうか、ソフイーヤは不安と好奇心を共に感じながら、指の腹をそこに押し当ててみる。

「んふう」

鼻にかかったような声が漏れた。まるで子犬が甘えるような、こんな声を摩耶に聞かれるのはあまりにも恥ずかしい。でもここはソフイーヤの私室であり、壁を隔てたメイドの部屋にまで聞こえるとは思えない。それでもつついつい、布団に大きく潜って声を押し殺してしまった。

(もう少し、奥まで……)

ぐり、ぐりぐり。ぐつ、ぐつ。中心部分は最も敏感なところなので、そこにはあまり触れないように、内腿の方を揉むように刺激する。骨盤に軽い衝撃が伝わってきて、ショーツがずれて「あの部分」に擦れてしまった。

「！」

くちゅつ、と湿った感触があった。

まだそこには直接触れてもいないのに、乙女の秘密の泉は既に潤いを見せ始めていたのだ。これまで擬似オナニーのようなことなら経験済みだが、自分の身体がそんな反応を見



せるのが初めてのことだったので、ソフィーヤは驚きを隠せない。

それに、今ショーツの布地が擦れた部分で、特に敏感に感じるところが、一か所あったのだ。けれど、そこに触れるのはまだためらいがあった。

(もう少しゆつくりと、今度は、両手で)

乳房を弄っていた左手を太腿の方に伸ばすと、ソフィーヤはワンピースの裾をたくし上げるようにして、左右から指先で恥骨付近をマッサージするように揉んでみた。片方だけの刺激よりも、振動がしっかり伝わってきて今度ははつきりと「気持ちいい」と感じるこ

とができた。

さっきの敏感な個所もそうだが、下腹部のさらに奥、お腹の深い部分がどんどん熱くな

って、奥から「じゅわり」と体液が滲み出たような気がする。

(やだ。お漏らししちゃった?)

だがそうではない。どちらかというどねつとりと濃厚な蜜のような液体が、花卉を濡らしながら身体の外に滲み出てくる感じ。それはあの敏感な部分にもまとわりついて、ますます存在感をアピールしてくるのだ。

そこが、クリトリスと呼ばれる器官であるという正確な知識は、ソフィーヤにはなかった。学業面においては既に大卒レベルに達している秀才少女だが、保健体育、ことに性に

関する知識は、まだまだ未熟といえた。

それでも年若い少女の肉体はほぼ大人といえるほどに成長し、こうして刺激を与えられると性的快感を感じるようにできている。少女の両手の指先は、ためらいつつも徐々に快感の中心部分に近づいていき、そうしてついに右手の中指が、ショーツの上から「その」部分を軽くタッチしたのだ。

「んあっ？」

一瞬、電気が走ったのかと思った。

それほどの鮮烈な快感が少女の骨盤を走り抜け、ソフィーヤは腰をふるふる震わせて愉悦の余韻を味わう。

（なに今の、なんかすごかった……もしかして、ここは触ってはいけない場所だったのかしら）

しかし余韻が波のように引いてしまうと、少女の好奇心がむくむくと頭をもたげてくるのがわかる。

痛み、ではない。むしろ乳首を弄った時の波紋にも似ていたが、あれよりずっとずっと鋭く、差し込んでくるような快感。こんな感覚を味わうのは生まれて初めてだった。

はあ、はあとベッドの中で息を荒らげつつ、ソフィーヤは無意識に両手をワンピースの

中で彷徨<sup>さまよ</sup>わせ、再びそこに指を押し当てる。今度はもつと慎重に、指の腹を押し込むように布地をそこに擦りつけてみる。

（なんだか、ちよつと硬くしこつてるみたい。でもお胸よりもずつと小さくて、なのにならずと敏感だわ）

自分の身体にこんな不可思議な部分が存在するだなんて、これは新鮮というより衝撃であった。それでもクリトリスを弄る指先が止められない。今はまだシヨーツの上から擦っているだけだが、もしも指先をシヨーツの中に入れて、ダイレクトにそこを弄ってみたらいったいどうなってしまうのだろう。

そこが女性器であり、男性と子作りをするために使用する部分であるという、その程度の知識ならソフイーヤにもある。しかし、ずつと屋敷にこもりきりだった少女は、元より子作りはおろか将来男性と結婚することすら思いつきもしなかったのだ。

それゆえ、自分の股間の反応が、成熟した女性のまっとうなりアクションであるということも想像の外にあった。

（やっぱりダメ、これ以上触り続けたら、私きつとヘンになってしまわ）

それにあのメイド、摩耶も女性の股間はデリケートだから乱暴に扱ってはいけないと言っていたではないか。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**